



## 私の人生でもらった“言葉の力”とは

2月11日、野球評論家の野村克也氏が急逝されました。多くの方がご存じの通り、野村氏は現役時代に戦後初の三冠王に輝くなど活躍し、引退後はヤクルトスワローズを「ID野球」で3回の日本一に導くなど、野球一筋の人生を歩んで来られました。そしてその口からこぼれだす「言葉」でも多くの人々を魅了しており、著書やインターネットを検索すれば、沢山の魅力的な語録を見つけることができます。

私自身も、野村氏の言葉では「失敗と書いて成長と読む」「見るべき人は、必ずどこかで見ています」といった“格言”に心惹かれたものです。そしてこれまで生きて来た間にも様々な人々の「言葉」に沢山の影響を受けていたことを思い出しました。

覚えている中で一番古いのは、予備校に通っていた時に現代文の講師から聞いた「人生はこれからが長いだから、受験などに煩わされることはない」というもの。その講師は試験の問題文に記号を付けることによって深く読み込まなくても回答が導き出せる、ある意味“邪道な”方法を編み出し、先ほどのセリフをよく口にしていました。それを聞いた時、試験でも何でもただひたすらに素直に真面目に取り組むのが当たり前という認識がガラガラと崩れ、力を抜いてもいいことがあるのだと気付いたのです。

学生時代は読書をしたり多くの講師や教授に出会える機会が多かったこともあり、響く言葉にも沢山出会えました。しかしさらにそうしたものの重みが増したのは、働くようになってからであったように思います。私が遊技業界に入ったのは、もちろんパチンコが好きというのもありましたが、ある意味「派手でキラキラしている」側面にも心惹かれた部分がありました。90年代中頃にはメディアがパチンコ業界の女性を取り上げることが増え、ある週刊誌で私がそうした関係者を取材することになった時の話です。

記事では何名かをホールで撮影&インタビューするのですが、私自身も女性業界関係者ということで、取材をしつつ誌面にも登場することになりました。業界の広報関係に登場した華やかなモデルさんの撮影に続き、私も何枚か写真を撮ったのですが、どうしても彼女のように笑顔が上手く作れません。思わずカメラマンさんに謝ると、その方は「さっきの人はあれが仕事だから当たり前ですよ。神保さんは自分の仕事(取材)をちゃんとやってるじゃないですか」と、励ましてくれたのです。

それを聞いた時、地味でも仕事を一生懸命やっていたら認めてくれる人がいるのだということに気付くと同時に、本質的な部分を評価される喜びを強く感じました。先ほど書いた、野村氏の「見るべき人は、必ずどこかで見ています」にも通じるものがあります。派手に見える遊技業界ですが、その陰にある本質的な部分を見失わないようにしなければ……と思いながら、最後に今後ずっと胸に留めて活動していきたい言葉を紹介します。

それは、私が業界誌記者になった1990年からお世話になった、当時の山田清一編集長から授かった「この業界は過去のを大切にしないところがあるから、資料をきちんと保管して書いていきなさい」というもの。遊技業界の歴史研究者としても第一線で活動されていた山田氏の言葉には、やはり本質的な問題が隠されていたと思います。その遺志を継いでいけるよう、この言葉を今一度深く心に刻んでおきたいです。



遊技業界の歩みや提言が詰まった山田清一氏の著書

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」(バジリコ、07年)